

## 趣旨説明

### 一 記念シンポジウムの経緯とねらい

比較思想学会は、平成二十五（二〇一三）年に四十周年を迎えた。本学会は昭和四十九（一九七四）年に中村元博士の大きな理想のもとに創立された。中村博士が一九八四年まで十年間会長を務めた後、名誉会長となり、その後、玉城康四郎（一九八四―一九八七）、峰島旭雄（一九八七―一九九〇）、田丸徳善（一九九〇―一九九三）、小山宙丸（一九九三―一九九六）、峰島旭雄（一九九六―一九九九）、吉田宏哲（一九九九―二〇〇五）、芹川博通（二〇〇五―二〇一一）の歴代の会長のもとで発展を遂げ、二〇一一年に私が会長に就任した。中村名誉会長（一九二一―一九九九）は、二〇一二年に生誕百年を迎え、今大会は、中村名誉会長の百周年を記念する大会でもある。

末木 文美士

そこで、六月十五、十六日に記念大会を開催し、「比較思想の新たな射程」というテーマで記念シンポジウムを行った。記念大会では海外の著名な研究者を招聘し、講演ならびにシンポジウムを開くことが慣例となっている。今回も当初はその予定であったが、適当な海外研究者がいまいことと同時に、今日、比較思想という問題を考えるためには、もう一度、国内の多分野の研究者から問題提起を受けるほうがよいという判断から、国内研究者を中心としたシンポジウムに切り替えて、準備を進めた。そのねらいは以下の通りである。

中村名誉会長は、「東洋人の思维方法」「比較思想論」「世界思想史」など、比較思想の名著を数多く著したが、単に過去の思想を比較するだけでなく、比較を通して現代の新しい思想を構築するのだからなければならないと考えていた。比較思想学会設立に際して、次のように述べている。

比較ということとはそれ自身意義のあることではあるが、われわれはそれを手がかりにして、思想に対する批判を行い、それを通路として新しい思想をつくり上げねばならない。新しい思想は、既存のものに対する比較を媒介とするものでなければ、形成され得ないであろう。だから比較が必要なのであるが、ただ第三者的に眺めて比較しているだけでは意義に乏しいであろう。「比較思想」はサロンの玩具にとどまってはならない。それは各個人の主体的な問題意識のうちを組み入れられ、生かされなければならない。

確かに、本学会の毎年の学術大会ではきわめて水準の高い発表が行われ、恒例のシンポジウムと併せて大きな成果を上げてきた。しかし、中村名誉会長の求めた新しい思想の構築という面でのだけの成果があるかという点、疑問とせざるを得ない。時代状況も中村名誉会長の時代から大きく変わり、過去の方法論がそのままでは通用しなくなっている。

このような現状を踏まえ、今回の記念シンポジウムは三つのセクションに分け、それぞれ会員外ではあるが、現代思想の最先端にあり、比較思想という観点からも大きな成果を上げている研究者をお招きして、その方を中心の発表者として、それに対して会員の研究者がコメントータとなり、その問題を比較思想の観点からどのように深めることができるかを論じることとした。

大会一日目（六月十五日）には、伊東俊太郎理事による基調

講演「日本における比較思想の系譜」の後、第一セクションとして、「中村元と比較思想」の問題を取り上げ、ゲストの若松英輔氏が「中村元と井筒俊彦」というタイトルで発表していた。二日目（六月十六日）には、午前中の個人発表の後、第二セクションとして「思想の社会的責任」という問題を取り上げ、ゲストの高橋哲哉氏の発表に対して、平山洋評議員がコメントータを務めた（司会・頼住光子氏）。最後に第三セクションとして「生命／科学／宗教」というテーマで、ゲストの森岡正博氏の発表に対して、氣多雅子理事がコメントータを務めた（司会・沖永宜司氏）。これら三つのセクションの議論により、まさに今日の問題に対して、比較思想がどのようなアプローチをすべきか、その方向性がかなり明らかになった。今回のシンポジウムを一回限りのお祭りで終わらせるのではなく、今後その成果を生かしながら、さらに議論を深めていくことが必要である。

## 二 現代のこととしての比較思想

各セクションの具体的な議論に関しては、以下のそれぞれの論文をご覧ください。ここではその全体的な序論として、今日、比較思想がどのようにして可能であり、また意義があるかについて、多少述べておきたい。まず、最近の欧米の比較思想の動向について略説し、その後で、私自身がいささか

考えている問題について触れることにしたい。

「比較思想」は英語にすると comparative philosophy であり、文字通り訳せば「比較哲学」になる。それが「比較思想」のほ  
うが広く用いられるのは、「哲学」の限定的なニュアンスを嫌  
うためであろう。欧米においても、西洋起源の philosophy を  
どこまで非西欧地域に用いることができるのか、大きな問題と  
なってきた。

例えば、「日本哲学」は成り立つのであろうか。この点に関  
して、話題となった研究書として、グレゴール・パウルの「日  
本の哲学——始原から平安時代まで」(一九九三)がある。本  
書でパウルが「日本の哲学」として高く評価するのは、平安時  
代の仏教論理学(因明)である。それに対して、日本で大きな  
影響を与えた「法華経」やその系譜に立つ天台などの思想の評  
価は低い。パウルによれば、矛盾律や同一律のような論理学の  
法則は普遍妥当的であり、それに従うもののみが哲学として認  
められる。しかし、そのような「哲学」概念はあまりに狭く、  
日本思想を理解する上で、必ずしも適切と言えないであろう。

また、ジョージ・アナスタプロ「しかし哲学ではない——七  
つの非西欧思想入門」(二〇〇二)は、メソポタミア、古代ア  
フリカ、ヒンドゥー、儒教、仏教、イスラム、北アメリカイン  
ディアン<sup>(3)</sup>の七つの思想伝統を取り上げるが、書名にある通り、  
それらを「哲学」とは認めていない。

こうした「哲学」の限界に対して方法論的な疑問を呈したの

が、ステイーヴン・プリクの「比較哲学の終焉と比較思惟の任  
務——ハイデガー、デリダ、道家」(二〇〇九)である。プリ  
クは、後期ハイデガーとデリダを使いながら、従来の西洋中心  
的な「哲学」の概念はもはや通用しないと、それに替わつ  
て、ハイデガーの Denken に由来する「思惟」(thinking)とい  
う概念を、普遍性を持ち、非西洋世界にも通ずるものとして採  
用している。このような立場から、従来の道家(道教)解釈に  
疑問を呈する。従来の解釈は、「老子」の「道」を西洋哲学と  
の比較から、「道」を根源的な実在のように解釈してきたが、  
その解釈を否定して、way-making(生成することとしての道)  
という解釈を提唱している。

今日では、たとえ「哲学」という語を用いるとしても、もは  
や従来のように素朴に西洋中心的概念を前提とすることはで  
きず、十分な方法的な反省を前提としなければならない。例  
えば、ハイジック、カスリス、マラルド編「日本哲学——資料  
集」(二〇一一)は、古代から近代に至るまでの「日本哲学」  
のアンソロジーであるが、序論にあたる部分で、かなり詳細に  
「哲学」の意味について検討している。従来の「哲学」概念に  
とらわれずに、いかに「日本哲学」を論ずることができるかに  
ついて、議論は大きく進展しつつある。私としては、今後の大  
きな課題として、近年進展の著しい「日本思想史」の研究の新  
しい成果をどのように「哲学」と結びつけることができるかが、  
次の課題ではないかと考えている。

さらに大きな視野での非西洋圏の「哲学」の概観として、ガ  
ーフィールド、エデルグラス編「オクスフォード世界哲学ハン  
ドブック」(二〇一一)が注目される。<sup>(6)</sup>本書は、第一部・中国  
哲学、第二部・インド非仏教哲学、第三部・インド・チベット  
仏教哲学、第四部・日本・韓国哲学、第五部・イスラム哲学、  
第六部・アフリカおよびアフリカ系哲学、第七部・グローバル  
哲学の最近の動向という七部からなり、七百頁を超える大冊で  
ある。

日本・韓国(朝鮮)哲学に関しては、日本倫理、日本美学と  
芸術哲学、自然と自由——日本思想における人間・自然の不  
性、道元禅師の哲学——無我の観点、西田幾多郎——自我・世  
界と根柢の無、韓国仏教哲学という章立てになっている。例え  
ば、「自然と自由」の項目では、西洋では相対立する「自然」  
と「自由」が日本では一致することなど、興味深い指摘が見ら  
れる。ただ、限られた分量でやむを得ないこととは言え、選択  
された問題が限られており、例えば韓国にさかれた分量が少な  
いなど、様々な問題を指摘できよう。

以上、近年の比較思想の動向をいささか紹介してみた。しか  
し、前述の中村名誉会長の指摘のように、単に過去の思想を比  
較するだけでは、比較思想の本来の目標は達せられない。そこ  
からさらに今日どのような思想を形成し得るかというところま  
で展開することが必要である。すでに紙数も尽きようとしてい  
るので、ここではこれ以上立ち入れないが、日本哲学研究者ト

マス・カスリス「自己統合性と他者親密性」(二〇〇二)に  
おける二つの思考類型の呈示<sup>(7)</sup>、それを応用して、日本の和辻倫理  
学をケアやフェミニズムの哲学と結びつけたエリン・マッカー  
シー「身体化された倫理」(二〇一〇)<sup>(8)</sup>などに新しい可能性が  
見られることを指摘するに留めたい。

- (1) 中村元「比較思想研究の未来性」『比較思想研究』二一九七四年、一〇頁。
- (2) Gregor Paul, *Philosophie in Japan: Von den Anfängen bis zur Heian-Zeit*, München: Iudicium, 1993.
- (3) George Anastasio, *But Not Philosophy: Seven Introductions to Non-Western Thought*, Lanham: Lexington Books, 2002.
- (4) Steven Burk, *The End of Comparative Philosophy and the Task of Comparative Thinking: Heidegger, Derrida, and Daoism*, State University of New York Press, 2009.
- (5) J. W. Heisig, T. P. Kasulis & J. C. Maraldo, *Japanese Philosophy: A Sourcebook*, University of Hawai'i Press, 2011, pp. 17-23.
- (6) Garfield & Edelglass (ed.), *The Oxford Handbook of World Philosophy*, Oxford University Press, 2011.
- (7) Thomas Kasulis, *Intimacy and Integrity: Philosophy and Cultural Differences*, University of Hawai'i Press, 2002.
- (8) Erin McCarthy, *Ethics Embodied: Rethinking Selfhood through Continental, Japanese, and Feminist Philosophy*, Lexington Books, 2010.

(すえき・ふみひこ) 仏教学・日本思想史、

国際日本文化研究センター教授)